

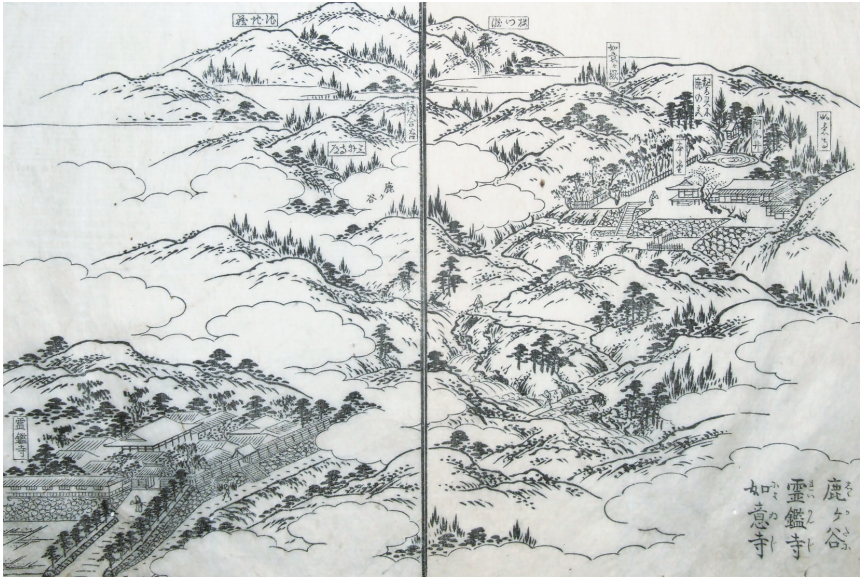
# 鹿ヶ谷〈風光明媚な丘陵〉



如意寺の全容〔三井寺如意寺絵図〕 実相院蔵

鹿ヶ谷は如意ヶ嶽の西麓丘陵に位置した集落で、北は浄土寺、南は南禅寺・栗田口に接していました。地名由来については、智証大師（円珍）がこの地を訪れた時に、一頭の鹿が現れ道案内をしたという伝承によります。平安時代以降、貴紳の寺院や山荘が営まれ、また円成寺（応仁の乱後に廃寺）付近は桜の名所ともなっており、風光明媚な丘陵地として知られていました。

とりわけ鹿ヶ谷の名前が有名になるのは、法勝寺執行であった俊寛が靈鑑寺の東方山中に山荘を構え、ここで平家打倒の談



鹿ヶ谷の景観（『拾遺都名所図会』天明7年（1787）刊）

合を行ったためです。しかし内通によって俊寛ら首謀者は捕らえられ遠島、山荘も没収されました。以来この山中を談合谷と伝えています。鹿ヶ谷は隣国近江との関わりでは、特に園城寺（三井寺）と通じる古道があって、両国間では如意越とも呼ばれていました。この一帯には比叡山三千坊の一つとされる如意寺（如意輪寺）が創建され、多くの堂舎が点在していたことを古絵図（写真）が物語っていますが、南北朝時代の兵火によって廃絶しました。江戸時代中頃になると、霊鑑寺の厄門跡によって再建されたことを『拾遺都名所図会』（一七八七年刊）に見ることができま（写真）。ところが明治維新後、再び荒廃してしまいました。

江戸時代は一五八石余の農村で、妙法院宮や青蓮院宮などが領主でした。鹿ヶ谷村は立地条件からして山論が絶えず、なかでも浄土寺村や近江の園城寺とも争いを起こしています。また興味深いことは、村に「郷侍」なる郷士がいたことです。かれらは妙法院や青蓮院などの領主ごとに数名おり、名字を名乗って、御用や神事の時には帯刀も許されていました。

現在の鹿ヶ谷はすっかり市街化して住宅や学校が建ちならんでいます。それでも往時の面影をしっかりとわれわれに語り伝えています。

# 浄土寺 〔祈りの丘〕



大文字送り火の風情（『都名所図会』安永9年（1780）刊）

浄土寺は如意ヶ嶽<sup>じょうどじ</sup>の西方にして、神楽岡<sup>かぐらおか</sup>（吉田山）の東の丘陵地に位置する地域で、中央部には白川が南流し、明治時代以降は東山麓を疏水が緩流します。浄土寺の地名由来については、慈照寺<sup>じじょうじ</sup>（銀閣）の地に、その建立以前の平安時代中頃に存在した天台宗浄土寺に依拠するといわれています。周辺には葬地もあり、浄土寺と関連する経塚も確認されています。

この一帯が注目されるようになるのは、第八代室町将軍足利義政が晩年に隠棲の場所として、当地に山荘を建立してからです。文明十四年（一四八二）から造営が順次進められて、長享三年（一四八九）には観音殿<sup>かんのんでん</sup>（銀閣・国宝）ができあがりました。しかしその翌年に義政は古くなり、遺言によって寺院に改められ慈照寺と名付けられました。集落の形成もこの頃と考えられており、中世には門跡寺院や公家の入組支配地であったといわれています。

江戸時代に至ると、集落としてもまとまりをもつようになりました。江戸時代前期では村高が四四三石で、十一もの



銀閣〈慈照寺〉の景観（『花洛名勝図会』元治元年（1864）刊）

領主によって支配されました。また浄土寺村は丘陵地であったため、山論や用水をめぐる争論もたびたび起こりました。南接する鹿ヶ谷村との山論、北接する白川村との用水争論は、江戸時代初頭から続きました。しかし本村の大きな特徴は、如意ヶ嶽中腹に設けられた大文字の存在でした。精霊しよりのようの送り火として夜空に浮かび上がる「大」の字は、毎年旧曆七月十六日、浄土寺村に人びとの手によって行われてきました。その風情は冬の積雪時にも「雪の大文字」として、都人の目を楽しませてくれました。

明治時代を迎えると琵琶湖疏水の支流が南から北に流れ、宅地化した清閑な当地では疏水路を「哲学の道」と呼び、広く市民に愛されてきました。歴史のなかに刻まれた文化は、浄土寺住民の生活のなかに生き続けているのです。

# 北白川 〈里人の絆〉



献饌された高盛御供の前では祝詞が奏上される

北白川とは白川の北部をさす地域名で、九世紀後半には北白川一帯は上栗田と称していたようです。北白川地域が注目されるようになるのは、平安時代末期の印地打ち（投石合戦行事）集団の集住からです。同地域は比叡山の山中越えの出入口に位置したところから、往古より政治・経済・文化の流れに敏感な一帯だったと思われまます。また山中越え沿いに流れる白川には水車小屋も敷設され、水利と地利を活かして発達した集落でもありました。ところが現在の北白川は、店舗や家屋が建ち並ぶ都会化し、旧地域の風情はなくなってしまいました。僅かに北白川の伝統文化として残された、北白川高盛御供・白川太鼓・鉄仙流白川踊り・白川女花売りといった儀礼から、昔の姿を偲ぶことができます。

当地域では、享保九年（一七二四）と文政十二年（一八二九）に起こった大火災のため村方文書は残っておらず、かろうじて領主聖護院や乗願院などの記録に頼るしかありません。そこで明治初期作成の白川村地籍図や宮座（祭祀組織）も考慮しつつ、当域の歩みを見ていきたいと思います。白川村（北白川）は七町から構成されており、東側から西側にかけて御門前町（河原町）・



市中に知られた北白川石工の活躍（『都名所図会』安永9年〈1780〉刊行）

かみの  
上之町・宮本町・中之町・薬師町・分木町・下之町しもからなりま  
す。一方村落としての基軸は「一の鉾・二の鉾・三の鉾」といっ  
た格式を誇る祭礼の組織（鉾組）が形成されています。たとえ  
ば「一の鉾」では中之町と薬師町が核になっていたことがわかっ  
ており、地域の拡大と共に「二の鉾・三の鉾」といった宮座の  
広がりも並行したと考えられます。宮座からは村内秩序や生活  
習慣を知ることとなりますが、なかでも現在伝わる北白川高盛  
御供（京都市無形民俗文化財）の神事は貴重です。

これは北白川天神宮の秋季大祭のなかで行われる祭儀で、特に  
各鉾組の当屋宅で行われる特殊神饌（神への供え物）の調製が注  
目されます。なお現在は保存会の組織のなかで一組の高盛御供が  
作られています。近辺で採れた季節の食材を厳選し、夜を徹して  
極める緻密な神饌は、もはや芸術品といえましょう。できあがっ  
た各種神饌は古式作法たる頭上運搬によって、早朝神社に納めら  
れます。この神事は毎年行われますが、古式にのっとり地区一丸  
となって進められる貴重な祭礼です。北白川は都会化されても、  
地域としての信仰や伝統文化がしっかりと息づいているのです。